

# 日本語の yes/no 疑問文の答えの派生と項の削除\*

神谷昇

神田外語大学

本稿では日本語の yes/no 疑問文の答えの派生を検討する。より具体的には、Takahashi (2008)の提案する「項の削除」を援用し、日本語の yes/no 疑問文の答えの派生にも PF での項の削除が関与していることを示唆する。このことにより、答えの文における数量詞の作用域に関する事実と、「省略」された目的語が主語位置の「省略」された名詞に束縛されるという事実に説明を与えることができる。

## 1. はじめに

本稿では(1b)に例示する日本語の yes/no 疑問文の答えの派生について検討する。

(1) a. 君は今日の朝日を読みましたか？

b. はい、読みました。 (Inoue (1989))

(1b)のような、日本語における yes/no 疑問文の答えの文の重要な特徴として、原則として動詞のみが出現し、主語や目的語などのその他の要素は出現しない (Inoue (1989)などを参照) ことが挙げられる。この事実について本稿では Takahashi (2008)が提案する PF での「項の削除(argument deletion)」が重

---

\* 本稿を準備するにあたり、藤巻一真氏との議論が大変に有益であった。また、長谷部郁子氏にも大変にお世話になった。ここに記して感謝したい。言うまでもなく、本稿の不備は筆者に帰せられるべきものである。

要な役割を果たしていることを示唆する。この分析に従えば、例えば、(1b)の派生は(2)のようになり、「私は」「今日の朝日を」は PF で削除されることになる。(なお、取り消し線は、それが付された要素が PF で削除され、発音されないことを表わす。以下同様。)

- (2) a. はい、私は 今日の朝日を 読みました。  
(スペルアウト前の構造、および LF での構造)  
b. はい、私は ~~今日の朝日を~~ 読みました。(PF)

以下では、2 節で Takahashi (2008)の提案する「項の削除」について概観し、3 節では、(2b)の派生を支持すると思われる例を提示する。4 節は本稿のまとめである。

## 2. 項の削除について

本節では、前節の(2b)で示した分析の基盤となる「項の削除(argument deletion)」(Takahashi (2008))について概観する。

Takahashi (2008)は主に数量詞の作用域に関する事実に基づき、項が PF で削除の対象となりうることを主張している(なお、あくまで「PF での」削除であり、「削除」の対象となる項は統語構造上、および、LF では存在していることに注意されたい。)この提案を支持する例の 1 つとして Takahashi は(3)を挙げている。

- (3) a. 花子がたいていの先生を尊敬している。  
b. 太郎も e 尊敬している。

(Takahashi (2008: 310))

この例で特筆すべきは、(3b)で「省略」されている要素(e で表示)の解釈である。つまり、e が、花子が尊敬している先生と同じ先生を指示するばかりでなく、e が指示している先生の集合と花子が尊敬している先生の集合とが異なりうる

という事実である。この事実から Takahashi は、(3b)においても数量詞の「たいていの先生」は LF に存在していると主張する。<sup>1</sup> そして、それは PF で削除されるので、(3b)に示すように発音上は現れないとされる。以上から、(3)は(4)のような派生を持つ。

- (4) a. 花子がたいていの先生を尊敬している。
- b. 太郎も ~~たいていの先生を~~ 尊敬している。

(Takahashi (2008: 310))

さらに Takahashi (2008)は、主語位置に数量詞が出現した場合に「削除」された目的語がどのように解釈されるのかについても検討している。具体的には、先行文(5a)で主語位置と目的語位置にそれぞれ数量詞があり、後続文(5b)で後者が「削除」されている場合と、先行文(6a)で目的語位置に生起すべき数量詞がかき混ぜ(scrambling)により文頭に前置され、後続文(6b)でそれに対応する要素が「削除」の対象となっている場合を扱っている。

- (5) a. 女子の誰かがたいていの先生を尊敬している。
- b. 男子の誰かも e 尊敬している。
- (6) a. たいていの先生を女子の誰かが尊敬している。
- b. 男子の誰かも e 尊敬している。

((5)と(6) : Takahashi (2008))

(5)と(6)の例で重要な点は、前者では先行文においても後続文においても主語の「誰か」が目的語の「たいていの先生」よりも義務的に広い作用域を取るのに対して、後者では、先行文ばかりでなく後続文においても(「削除」された)目的語の

---

<sup>1</sup> もし「たいていの先生」が full-fledged な名詞句ではなく、代名詞(たとえば pro)の場合には花子の尊敬する先生と太郎の尊敬する先生は同一であるはずである。詳しくは Takahashi (2008)の議論を参照。

数量詞が主語のそれよりも広い作用域を取りうる事実である。これらについて Takahashi (2008)は以下のように分析する。

まず、(5)については、日本語では基本語順(SOV)の場合、主語が目的語よりも広い作用域を取ること（および、その逆の解釈はありえないこと）(Hoji (1985)、Kuroda (1992)など)を踏まえ、目的語の「たいていの先生」は LF でも主語よりも低い位置にあるため、このような解釈が得られると Takahashi (2008)は主張する。また、それは PF で削除の対象となるために(5b)では発音上は現れない ((7b)を参照)。

- (7) a. 女子の誰かがたいていの先生を尊敬している。  
b. 男子の誰かも ~~たいていの先生を~~ 尊敬している。

(Takahashi (2008: 311))

また、(6)については主語が目的語よりも広い作用域を取る解釈の場合と、その逆の解釈の場合とでは派生が異なる。説明の便宜上、後者から検討したい。この場合には、(8)に示したように、先行文においても後続文においても目的語の「たいていの先生」がかきまぜの適用により TP に付加される。その上で、(8b)に示すように、後続文の TP に付加された目的語が PF で削除される。一方、どちらの文においても LF で目的語は（再構築(reconstruction)の適用を受けず）その場所にとどまっているので、目的語が主語よりも広い作用域を取る解釈が得られる。（このことから、「発音には反映されない『かきまぜ』」(inaudible scrambling)があることが支持される (Takahashi (2008)).)

- (8) a. [TP たいていの先生を [TP 女子の誰かが [VP *t* 尊敬  
している]]]  
b. [TP ~~たいていの先生を~~ [TP 男子の誰かも [VP *t* 尊敬  
している]]]


(Takahashi 2008: 318))

これに対して(6)で主語が目的語よりも広い作用域を取る場合には、以下のような派生を経ることになる。まず、(9)は(6)のスペルアウト前の統語構造、および PF での構造である。(9a)では目的語がかきまぜにより TP に付加され、また、(9b)では目的語は元の位置で PF で削除される。

- (9) a. [TP たいていの先生を [TP 女子の誰かが [VP *t* 尊敬している]]]  
 b. [TP 男子の誰かも [VP ~~たいていの先生を~~ 尊敬している]]

(Takahashi 2008: 319))

次に、(9)は LF では以下のような構造になる。

- (10) a. [TP \_\_\_\_ [TP 女子の誰かが [VP たいていの先生を 尊敬している]]  
  
 b. [TP 男子の誰かも [VP たいていの先生を 尊敬して  
 いる]]

(Takahashi 2008: 319))

つまり、(10a)において、スペルアウト前にかきまぜにより TP に付加された目的語「たいていの先生」が LF で再構築の適用を受け、元の位置に戻されている（なお、(10b)ではそもそも目的語はかきまぜの適用を受けていないので派生のどの段階でもこの位置にあることに注意されたい）。(10a, b)のどちらの文においても主語が目的語よりも構造上、高い位置に

あるので、前者が後者よりも広い作用域を取る解釈が得られる。<sup>2</sup>

また、Takahashi (2008)は以上で概観した数量詞に関する事実のほかに、「自分」の解釈に関する事実(11)を挙げている(cf. Xu (1986))。

(11) a. Speaker A: 誰が自分を批判しましたか？

b. Speaker B: 太郎<sub>1</sub>／誰も<sub>1</sub>が e<sub>1</sub> 批判しました。

(Takahashi (2008: 309))

(11b)で「省略」されている e は(11a)の「自分」の代用形であり、主語の「太郎／誰も」により束縛されていると考えられるが、(12)に示すように統語構造上は「自分を」が存在し、それが PF で削除されていると考えればこの例の文法性が説明できる。

(12) 太郎／誰もが ~~自分を~~ 批判しました。

(Takahashi (2008: 309))

以下の3節では本節で概観した Takahashi (2008)の項の削除の分析を踏まえ、日本語の yes/no 疑問文の答えの派生について検討する。

### 3. 日本語の yes/no 疑問文の派生について

本節では、日本語の yes/no 疑問文の答えの派生を検討する。より具体的には、2節で概観した Takahashi (2008)の項の削除分析を踏まえ、日本語の yes/no 疑問文の答えの派生にも PF での項の削除が関与していることを提案する。この分析に従えば、例えば、(13a) (= (1a))に対する答えの派生は(13b, c)で

---

<sup>2</sup> なお、先行文で主語の作用域が目的語のそれよりも広く、後続文で目的語の作用域が主語のそれよりも広くなる、といったような解釈(mixed interpretation)は存在しない。詳しくは Takahashi (2008)を参照。

あると考えられる。(なお、動詞は V から v を経由して T (さらには C) にまで移動すると仮定しているが、本稿ではこの問題についてこれ以上立ち入らないことにする。この問題に関しては神谷(2008)、Kamiya (2008)を参照。)

(13) a. 君は今日の朝日を読みましたか？

b. はい、[TP 私は [vP 今日の朝日を t<sub>v</sub>][T 読みました]]  
(スペルアウト前の統語構造、および LF での構造)

c. はい、[TP ~~私は~~ [vP ~~今日の朝日を~~ t<sub>v</sub>][T 読みました]]  
(PF)

(13)に提示する分析は、以下の3つの事実から支持される。

1 つめとしては、典型的には日本語の yes/no 疑問文の答えでは動詞のみが出現し、主語や目的語などは出現しないという事実である。上記の(13) (= (1))がこれに該当し、それらが PF で削除されていることを示している。ただし、(13)はあくまで「典型例」であり、主語や目的語など、動詞以外の要素が現れる場合もある。例えば以下の(14b)では目的語が「削除」され、その結果、主語が動詞とともに残されている。また、(15b)では主語が発音されず「削除」され、目的語が動詞とともに出現している。

(14) a. あなたは LGB を 読みましたか？

b. いいえ、太郎が ~~LGB~~ を 読みました。

(15) a. あなたは 朝日を 読みましたか？

b. いいえ、私は 読売を 読みました。

2 点目として、数量詞の作用域に関する事実をあげることができる。日本語では基本語順 (SOV) の場合、主語位置にある数量詞が目的語位置にある数量詞よりも義務的に広い作用域を取るが、かきまぜを適用し、目的語を文頭に前置した場合には解釈が二義的になる (Hoji (1985), Kuroda (1992)な

ど)。この事実は(16)と(17)から確認できる。

- (16) a. 誰かが 誰をも 責めた。(非曖昧)  
b. (i) (16a)の可能な解釈:  
全員を責めた人がある。(誰か>誰も)  
(ii) (16a)が持ち得ない解釈:  
各個人について責めた人があるが、それは個人  
ごとに違っている。(誰も>誰か)
- (17) a. 誰をも<sub>i</sub> 誰かが<sub>i</sub> 責めた。(曖昧)  
b. (17a)が持ちうる解釈  
(i) 全員を責めた人がある。(誰か>誰も)  
(ii) 各個人について責めた人があるが、それは個人  
ごとに違っている。(誰も>誰か)

興味深いことに、yes/no 疑問文にかきまぜを適用した場合、その答えについても(17a)と同様に解釈が二義的になる(神谷(2008)、Kamiya (2008))。この事実は(18)に示されている。

- (18) a. 誰をも誰かが愛していますか?  
b. はい、愛しています。  
(i) 誰か>誰も / (ii) 誰も>誰か

この事実についても、項の削除により説明できる。説明の都合上、目的語の数量詞「誰も」が主語の数量詞「誰か」よりも広い作用域を取る場合から検討する。この場合には、(18b)は以下のような構造を持っているものと考えられる。

- (19) a. はい、[<sub>TP</sub> 誰も<sub>j</sub>を [<sub>TP</sub> 誰か<sub>i</sub>が [<sub>VP</sub> <sub>t<sub>i</sub></sub> <sub>t<sub>j</sub></sub> <sub>t<sub>V</sub></sub>]  
[<sub>T</sub> 愛しています]]]  
(スペルアウト前、および LF での構造)
- b. はい、[<sub>TP</sub> ~~誰も<sub>j</sub>~~を [<sub>TP</sub> ~~誰か<sub>i</sub>~~が [<sub>VP</sub> <sub>t<sub>i</sub></sub> <sub>t<sub>j</sub></sub> <sub>t<sub>V</sub></sub>]  
[<sub>T</sub> 愛しています]]] (PF)




つまり、(19a)に示すように、LF では前置された目的語は再構築の適用を受けず、主語よりも構造上、高い位置に存在するので、前者が後者よりも広い作用域を取ることが可能である。また、PF では TP に付加された「誰も」と主語の「誰か」は項の削除の適用を受けるので、(18b)のように発音には現れない。

また、主語の数量詞が目的語の数量詞よりも広い作用域を取る解釈については Takahashi (2008)に倣い、再構築が派生に関与していると考えられる。つまり、PF では(18)は(20)の構造を持ち、答えの文(20b)で主語とかき混ぜの適用を受けずに元位置にとどまっている目的語が削除される。

(20) a.  $[_{TP} \text{誰も}_j \text{を } [_{TP} \text{誰か}_i \text{が } [_{VP} t_i t_j t_V] [_T \text{愛していますか?}]]]$

b. はい、 $[_{TP} \text{誰か}_i \text{が } [_{VP} t_i \text{誰もを } t_V] [_T \text{愛しています}]]]$   
(スペルアウト前、および PF での構造)

また、LF では(18a)で文頭に前置された目的語が再構築の適用を受け、元位置に戻される。このことは(21a)に示されている。

(21) a.  $[_{TP} \text{ } [_{TP} \text{誰か}_i \text{が } [_{VP} t_i \text{誰もを } t_V] [_T \text{愛していますか?}]]]$   

再構築

b. はい、 $[_{TP} \text{誰か}_i \text{が } [_{VP} t_i \text{誰もを } t_V] [_T \text{愛しています}]]]$   
(LF での構造)

この結果、(21a, b)どちらの構造においても、主語の数量詞が目的語のそれよりも高い位置にある。構造上高い位置にある数量詞の方が低い位置にある要素よりも広い作用域を取るので、(21)から(18b)が主語が目的語よりも広い作用域を取る解

釈を持ちうることで導き出せる。<sup>3</sup>

最後に照応形に関する事実を挙げることができる。2 節の最後で概観したように、項の削除分析は、後続文における「自分」の解釈をも正しくとらえることができるが(例は(22)に、派生は(23)に再録する)、yes/no 疑問文の答えの文(例えば(24b))においても「削除」された「自分」の解釈を正しくとらえることができる。

(22) a. Speaker A: 誰が自分を批判しましたか?

b. Speaker B: 太郎<sub>1</sub>/誰も<sub>1</sub>が e<sub>1</sub> 批判しました。

(Takahashi (2008: 309)) (= (11))

(23) 太郎/誰もが ~~自分を~~ 批判しました。

(Takahashi (2008: 309)) (= (12))

(24) a. 太郎は 自分を 責めましたか?

b. はい、責めました。

つまり、(25)に示すように、(24b)で主語の「太郎」も目的語の「自分」も PF において削除されているのであり、LF ではどちらも存在し、前者が後者を束縛していると考えerことで説明できる。

---

<sup>3</sup> 日本語の yes/no 疑問文の答えでは主語や目的語が削除されずに現れうることをこの節のはじめで指摘したが((14)、(15)を参照)、通常の名詞句ばかりでなく、数量詞を主語位置・目的語位置に残すこともできる(藤巻一真氏の指摘による)。

(i) a. 誰もを誰かが愛していますか?

b. はい、誰かが愛しています。

c. はい、誰もを愛しています。

(ia)では目的語が文頭に前置されているので、(ib, c)においても(18)と同様に解釈が二義的であるように思われる。これが正しいとすると、(ib, c)においても(18)とほぼ同様の派生を経ることになるが(18)とは違って、(ib)では目的語のみが、(ic)では主語のみが PF で削除されていることになる。

- (25) a. はい、責めました。(= (24b))  
 b. はい、 $[_{TP}$  太郎<sub>i</sub>は  $[_{VP}$   $t_i$  自分<sub>i</sub>を  $t_V$ ]  $[_T$  責めました]]  
 (スペルアウト前、および LF での構造)  
 c. はい、 $[_{TP}$  太郎<sub>i</sub>は  $[_{VP}$   $t_i$  自分<sub>i</sub>を  $t_V$ ]  $[_T$  責めました]]  
 (PF)

本節の議論を終える前に yes/no 疑問文の派生についての別の可能性について検討しておきたい。上で議論したように、本稿はその派生に PF での項の削除が関与していると提案しているが、「削除」されている要素は派生の当初から代名詞の *pro* として統語構造（と LF、PF）に存在していると考えられることも可能である（実際に、Inoue (1989) では *pro* を用いた分析が提示されている。）この分析に従えば、例えば、(26b)の構造は(27)であることになる。

- (26) a. 君は今日の朝日を読みましたか？  
 b. はい、読みました。 (Inoue (1989)) (= (1))

(27) はい、*pro pro* 読みました。

(27)において、はじめの *pro* は主語の「私は」の、2 つ目の *pro* は目的語の「今日の朝日を」の代用形である。

しかし、*pro* を用いた分析では、照応形に関する事実が説明できない。例えば、以下に(28)として繰り返す(24)の構造は、この分析によると(29)であると考えられるが、目的語（つまり、「自分」の代用形）の *pro* が主語位置にある *pro*（「太郎」の代用形）と同一指標を持ち、c-統御されている。（文法関係を表示するために、便宜上、(29)では *pro* に助詞をつけている。）

- (28) a. 太郎<sub>i</sub>は 自分<sub>i</sub>を 責めましたか？  
 b. はい、責めました。

(29) はい、 $\text{pro}_i$  は  $\text{pro}_i$  を 責めました。

$\text{pro}$  は代名詞の性質を持つので、ある一定の領域で束縛されてはならない（束縛条件 B）。しかし、(29)では主語の  $\text{pro}$  が目的語の  $\text{pro}$  を束縛しているのでこの条件に違反し、(26b)は非文であると予測されるが、これは事実とは異なる。したがって、削除されている要素は  $\text{pro}$  ではなく、本稿で提案しているように PF で削除の適用を受けているものと考えられる。

#### 4. まとめ

本稿では日本語の *yes/no* 疑問文の答えの派生について Takahashi (2008)が提案する項の削除の観点から検討した。そして、主に数量詞の作用域に関する事実と束縛に関する事実から、日本語の *yes/no* 疑問文の派生にも PF での項の削除が関与していることを示唆した。

#### 参考文献

- Hoji, H. (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*, Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Inoue, K. (1989) “Three Types of Elliptical Sentences in Japanese,” *Theoretical and Empirical Studies of the Properties of Japanese in Terms of Linguistic Universals* 5, 4 – 20, 神田外語大学.
- 神谷昇(2008)「日英語の Yes/No 疑問文の答えの統語構造」、『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言(1)』（平成 19 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）研究成果報告書）、研究代表者：長谷川信子）、271 – 283、神田外語大学.

- Kamiya, N. (2008) "The Structure and Derivation of an Answer to a Yes/No Question in English and Japanese," *Scientific Appraoches to Language* 7, 63 – 78.
- Kuroda, S-Y. (1992) *Japanese Syntax and Semantics*, Kluwer.
- Takahashi, D. (2008) "Quantificational Null Objects and Argument Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 39, 307 – 326.
- Xu, L. (1986) "Free Empty Category," *Linguistic Inquiry* 17, 75 – 93.

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学言語科学研究センター

*nkamiya@kanda.kuis.ac.jp*